

各関係機関団体の長  
各病虫害防除員 } 殿  
J P P - N E T 会 員

福岡県病虫害防除所長

平成22年度病虫害発生予報第1号(4月)について

このことについて、病虫害発生予報第1号を発表したので送付します。

予報第1号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生時期 (予想)	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	平年比	前年比
麦類	赤かび病	やや早	-	並	並
かんきつ	かいよう病 ミカンハダニ	- -	並 やや少	並 やや少	やや少 やや少
なし	黒星病 赤星病	早 早	- -	並 やや多	並 並
かき	フジコナカイガラムシ	-	-	並	並
冬春イチゴ	うどんこ病 灰色かび病 ハダニ類	- - -	やや多 やや多 やや少	やや多 やや多 やや少	やや多 やや多 並
冬春ナス	すすかび病	-	やや多	並	並
冬春トマト	灰色かび病	-	並	並	やや多
冬春キュウリ	うどんこ病 褐斑病	-	並 並	並 並	やや少 やや多
野菜共通	ミナミキイロアザミウマ コナジラミ類	- -	やや多 やや多	やや多 やや多	やや多 やや多
茶	カンザワハダニ	-	並	並	並

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。  
天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。  
気温は低いでしょう。降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。  
週別の気温は、1週目、2週目は低く、3~4週目は高いでしょう。

要素別確率

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	40	30	30
降水量	40	30	30
日照時間	30	30	40

(福岡管区気象台 平成22年3月26日発表抜粋)

## 作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

### 【普通作物】

#### 1 麦類の赤かび病

##### （ 1 ）予報の内容

発生時期：平年よりやや早

発生量：平年並・前年並

##### （ 2 ）予報の根拠

ア 向こう1か月の気象予報では、降水量は平年より少なく（ - ）、開花期に当たる4月中下旬の気温は平年より高い（ + ）見込みである。

イ 農業総合試験場の調査によると、今後気温が平年並で経過した場合、出穂期は小麦、大麦ともに平年より4～6日、前年より2～4日早くなると予想されている（平成22年3月19日付福岡県米麦大豆生育情報参照）。

##### （ 3 ）防除上注意すべき事項

ア 主要感染時期である開花期から開花期10日後までに曇天、降雨が続き、暖かい（平均気温15以上）場合には、本病が多発する可能性が高い。

イ 小麦の防除適期は、開花期（出穂期後7～10日頃）である。適期防除を実施後、降雨が続く場合はその7～10日後に2回目の防除を行う。

ウ 二条大麦の防除適期は、穂揃期後約10日頃（出穂期後12～14日、葯殻が抽出し始める頃）である。この時期は収穫前30日頃となるため、薬剤の選定に当たっては、収穫前規制に留意する。

エ 裸麦の防除適期は、穂揃期（出穂期後2～4日）である。適期防除を実施後、降雨が続く場合はその7～10日後に2回目の防除を行う。

オ 出穂期は、播種日、品種及び今後の気温の変動等によりほ場ごとに異なるので注意する。

カ 降雨の合間に薬剤防除を行う場合、液剤は散布後一旦乾けば降雨があっても薬剤の効果はある。しかし、粉剤の場合は、散布後6時間以内に降雨があった場合は薬剤の効果が低下するため、天候に留意して散布する。

キ 防除に当たっては、農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守するとともに、周辺圃場への飛散防止対策を講ずる。特に、薬剤によっては、小麦、大麦で農薬使用基準が異なる場合があるので注意する。

### 【果樹】

#### 1 かんきつかいよう病

##### （ 1 ）予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

##### （ 2 ）予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（ ± ）。

発病葉率 0.6%（平年 0.7%、前年 1.1%）

発生ほ場率 27.3%（平年 19.3%、前年 45.5%）

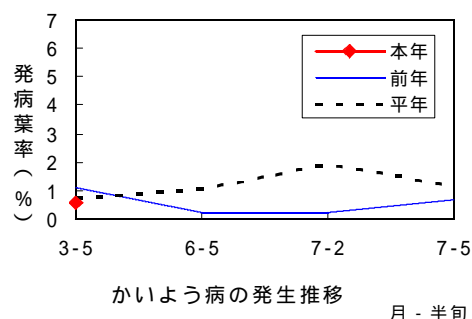
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている（ - ）。

##### （ 3 ）防除上の注意

ア 伝染源である罹病葉や罹病枝は極力除去し、園外に持ち出して処分する。

イ 風雨によって伝染するので、強風雨が予想される場合は、必ず予防散布を行う。

ウ 多発園では、防風対策やミカンハモグリガの防除を徹底する。



## 2 かんきつのミカンハダニ

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

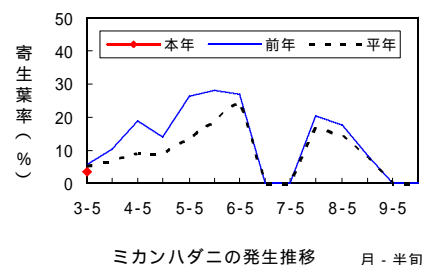
### (2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

寄生葉率 3.6% (平年 5.1%、前年 5.5%)

発生ほ場率 54.5% (平年 40.4%、前年 54.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(±)。



## 3 なし黒星病

### (1) 予報の内容

発生時期：平年より早

発生量：平年・前年並

### (2) 予報の根拠

ア 前年の8月2半旬調査の結果、発生量は平年並で、越冬菌量は平年並と思われる(±)。

発病葉率 0.1% (平年 0.5%、前年 1.4%)

発生ほ場率 9.1% (平年 37.0%、前年 57.1%)

イ 幸水及び豊水の開花始めは平年より7~9日程度早い(農業総合試験場調べ)。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(-)。

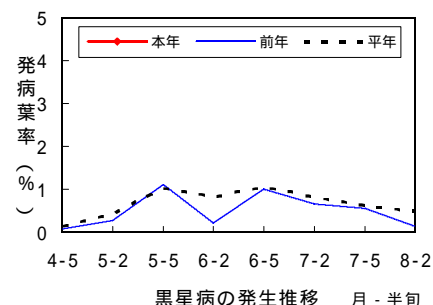
### (3) 防除上の注意

ア 薬剤防除は、開花直前から満開20日後の重要防除時期に、スコア顆粒水和剤やベルコート水和剤を混用したDMI剤を主体に実施する。

イ DMI剤に保護殺菌剤を混用する場合は、防除効果が低下するものがあるので、薬剤の選定には注意する。

ウ 伝染源である芽基部病斑はできるかぎり剪除し、園外に処分する。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、DMI剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



## 4 なし赤星病

### (1) 予報の内容

発生時期：平年より早

発生量：平年よりやや多、前年並

### (2) 予報の根拠

ア 前年の5月5半旬調査の結果、発生量は平年並で、越冬菌量は前年並と思われる(+)

発病葉率 4.3% (平年 2.6%、前年 10.9%)

発生ほ場率 66.7% (平年 38.3%、前年 80.0%)

イ 3月26日に行ったビャクシン類の冬孢子堆成熟度調査では、34.8%(前年 47.5%)で飛散が早かった前年並である(+)

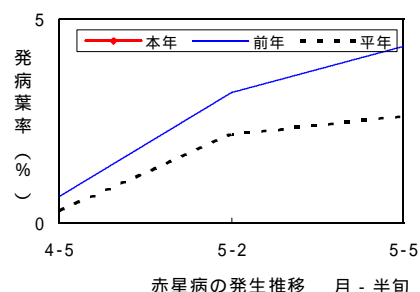
ウ 3月28日時点の平均気温から予想される小生子の飛散は、4月10日以降の雨によりピークを迎えると予想される(予想は福岡県立園芸試験場の相関式による)。

エ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(-)。

### (3) 防除上の注意

ア DMI剤の効果が劣る産地では、落花後の降雨前に黒星病との同時防除を兼ねて散布するDMI剤(アンビルフロアブル、インダーフロアブル等)に保護殺菌剤を混用する。

イ 福岡管区気象台発表の週間天気予報で降雨日に注意し、防除時期を逸しないよう心がける。



5 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 前年の10月2半旬調査の結果、発生量はやや少なかったため、越冬量は平年より少ないと思われる(-)。

寄生果率 12.2% (平年 19.1%、前年 12.3%)

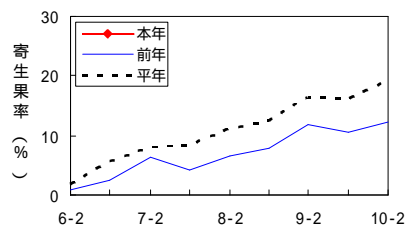
発生ほ場率 85.7% (平年 91.8%、前年 85.7%)

イ 10月～11月に行った収穫前立木調査では発生が多かった(+)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

越冬幼虫の新梢への移動時期から薬剤防除を徹底する。



フジコナカイガラムシの発生推移 月・半旬

【果樹・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量(現況)		発生量(予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	前年比	平年比	前年比	
かんきつ そうか病	並	並	並	並	発芽直後～展葉期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。 罹病葉は伝染源になるので除去する。
ぶどう 黒とう病	-	並	並	並	頂芽の展葉2～3枚期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。 罹病枝や巻きひげは除去する。
かき 炭疽病	-	-	-	-	伸長始めから硬化前までで感染発病する。 薬剤防除は、天気予報の最高気温と最低気温の和が40以上で降雨が予想される日の直前から開始する。
果樹カメムシ類	-	-	並	並	4～7月までの発生量は平年並(平成18年並)と予想されるが、気温が高い場合、早期に飛来することがあるので、園への飛来状況の把握に努める。(平成22年3月12日付「技術情報第10号」参照)

【野菜】

1 イチゴうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

発病株率 1.5% (平年 0.7%、前年 0.3%)

発生ほ場率 30.4% (平年14.0%、前年 8.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、日照時間は多く、降水量は少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

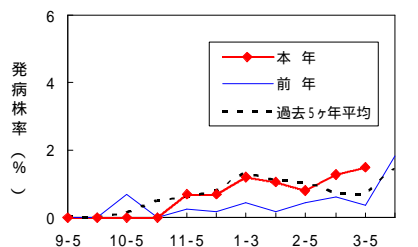
ア 罹病葉、罹病果は見つけ次第処分する。

イ 下葉かぎ後、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

ウハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する(以下の病害虫についても同様)。

オ 栽培が終了したら、罹病株は直ちにほ場外へ持ち出し処分する。



うどんこ病の発生推移 月・半旬

## 2 イチゴ灰色かび病

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

### (2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並よりやや多かった(+)。

発病果率 0.3% (平年 0.1%、前年 0.1%)

発生ほ場率 30.4% (平年16.9%、前年30.4%)

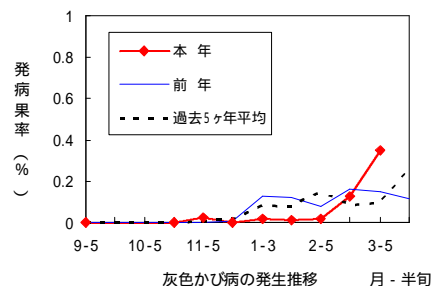
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(-)。

### (3) 防除上の注意

ア 罹病葉、罹病果は見つけ次第処分する。

イハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 老化葉は随時除去し、株間の通風、採光を図る。



## 3 イチゴのハダニ類

### (1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

### (2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

寄生株率 10.6% (平年16.8%、前年12.9%)

発生ほ場率 47.8% (平年64.7%、前年69.6%)

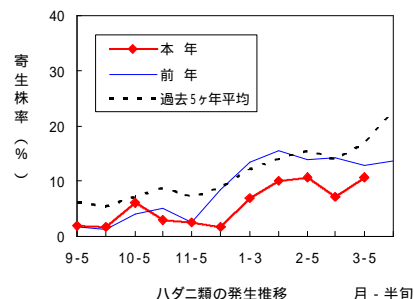
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(-)。

### (3) 防除上の注意

ア 薬剤散布は摘葉後に葉裏にも十分かかるよう丁寧に行う。

イ 摘除した葉や雑草は、ほ場内に放置しない。

ウ カブリダニ類を放飼しているほ場では、天敵に対して影響の少ない殺ダニ剤を散布する。



## 4 ナスすすかび病

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

### (2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

発病葉率 23.4% (平年19.2%、前年17.4%)

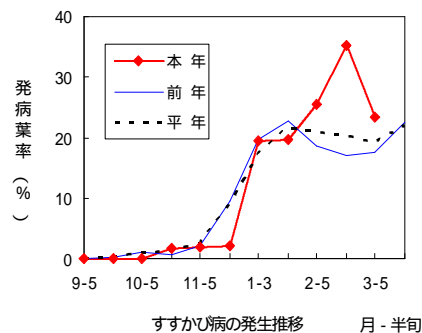
発生ほ場率 66.7% (平年90.4%、前年88.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(-)。

### (3) 防除上の注意

ア 罹病葉は早めに除去し、ほ場外に処分する。

イハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。



## 5 トマト灰色かび病

### (1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

### (2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった

(±)。

発病果率 0.6% (平年 0.6%、前年 0.3%)

発生ほ場率 50.0% (平年 44.4%、前年63.6%)

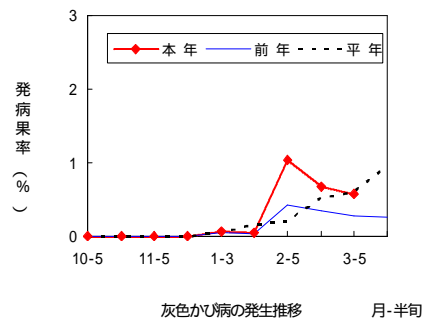
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(-)。

### (3) 防除上の注意

ア 罹病葉、罹病果は見つけ次第処分する。

イ 葉先枯れした葉は、本病の発生要因となるので摘除する。

ウ 하우스の換気を行い、湿度の低下を図る。



## 6 キュウリうどんこ病

### (1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

### (2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった

(±)。

発病葉率 1.0% (平年 1.2%、前年 3.2%)

発生ほ場率 50.0% (平年27.3%、前年33.3%)

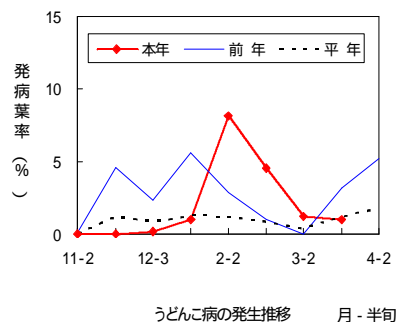
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(±)。

### (3) 防除上の注意

ア 罹病葉はできる限り除去する。

イ 薬剤散布は、葉裏にも十分かかるよう丁寧に行う。

ウ ハウス内の換気を行い、湿度の低下を図る。



## 7 キュウリ褐斑病

### (1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

### (2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった

(±)。

発病葉率 7.2% (平年 6.9%、前年 1.8%)

発生ほ場率 33.3% (平年33.3%、前年16.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(-)。

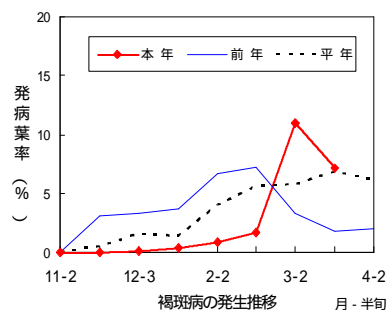
### (3) 防除上の注意

ア 罹病葉はできる限り除去する。

イ 薬剤散布は、葉裏にも十分かかるよう丁寧に行う。

ウ ハウス内の換気を行い、湿度の低下を図る。

エ 肥料切れにより発病が助長されるので、適正な肥培管理に努める。





## 8 ミナミキイロアザミウマ（野菜共通）

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

### (2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量はやや多かった

(+)。

ナス寄生葉率 13.7% (平年 4.8%、前年 3.2%)

ナス被害果率 0.6% (平年 0.5%、前年 0%)

キュウリ寄生葉率 5.5% (平年 7.6%、前年 9.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(-)。

### (3) 防除上の注意

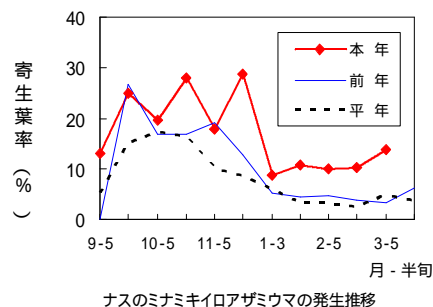
ア 本種は、キュウリ黄化えそ病(MYSV)の媒介虫である。このウイルスはアザミウマ類が低密度でも伝染し蔓延するので、早期発見に努め、防除を徹底する。

イ 葉裏への寄生が多いので、散布むらがないよう丁寧に散布する。また、多発した場合は、約1週間後にもう一度薬剤散布を行う。

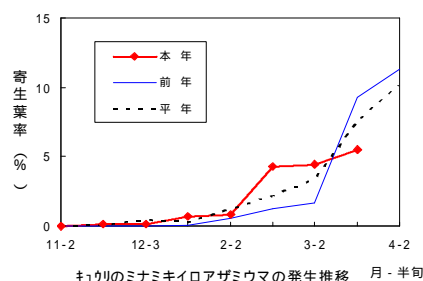
ウ ほ場内外の雑草を徹底して除去し、害虫の増殖源を絶つ。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続

散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤感受性検定結果については、「病害虫・雑草防除の手引き」を参照する(ホームページアドレス <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/tebiki/pe-ji/yasai/yasai-mokuji.html>)。



ナスのミナミキイロアザミウマの発生推移



キュウリのミナミキイロアザミウマの発生推移

## 9 コナジラミ類（野菜共通）

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

### (2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

ナス寄生葉率 12.2% (平年 5.5%、前年 3.3%)

トマト寄生葉率 0.3% (平年 3.6%、前年 0.3%)

キュウリ寄生葉率 1.6% (前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は低く、降水量は少ないとされている(-)。

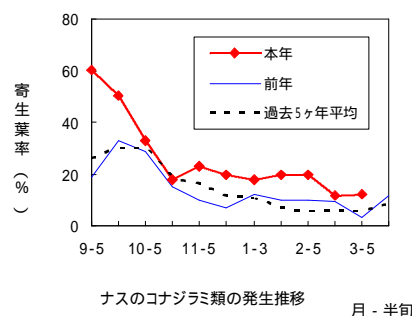
### (3) 防除上の注意

ア タバココナジラミはトマト黄化葉巻病(TYLCV)やキュウリ退緑黄化病(CCYV)の媒介虫であるので、早期発見に努め、防除を徹底する。

イ 幼虫や蛹が寄生している下位葉を除去し、散布むらがないように丁寧に散布する。

ウ ほ場内の雑草の除去を徹底し、害虫の増殖源を絶つ。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤感受性検定結果については、「病害虫・雑草防除の手引き」を参照する(ホームページアドレス <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/tebiki/pe-ji/yasai/yasai-mokuji.html>)。



ナスのコナジラミ類の発生推移

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量(現況)		発生量(予想)		防除上注意すべき事項等
	発生量	発生量	発生量	発生量	
	現況	現況	現況	現況	
冬春ナス うどんこ病 灰色かび病	並	並	並	並	・換気を行い湿度の低下を図る。 ・罹病葉や罹病果は見つけ次第除去する。
冬春トマト 葉かび病	少	少	少	少	・換気を行い湿度の低下を図る。
冬春キュウリ べと病 灰色かび病	少 並	少 並	やや少 並	やや少 並	・草勢の維持に努める。 ・罹病果は見つけ次第除去する。

【茶】

1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生葉率 3.6%(平年 2.5%、前年 4.7%)

50葉当たり虫数2.2頭(平年 2.7頭、前年 4.3頭)

発生ほ場率 58.8%(前年 55.6%)

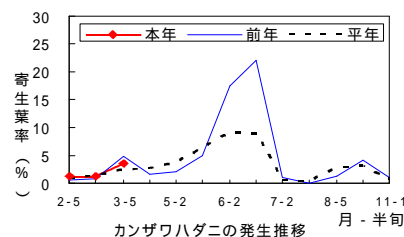
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より低く、降水量は平年より少ないとされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア ほ場をよく観察し、寄生葉率2%以上の茶園では、農薬使用基準を遵守し防除を行う。

イ 霜害後は多発しやすいので、なるべく早めに防除する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



**農薬の適正使用、飛散防止対策の徹底を！**

全ての農薬について残留基準が農作物毎に設定され、基準値を超えた食品(農産物)は販売が禁止されています。

農薬の使用に当たっては、ラベルをよく確認し農薬の使用基準を遵守するとともに周辺に飛散(ドリフト)しないよう対策を講ずるなど十分に注意を払って下さい。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数など、ラベルを確認し使用基準を遵守する。

噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬(剤型)や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除について、ホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpnp.ne.jp/fukuoka>

電子メール [kfok0301@sp.jpnp.ne.jp](mailto:kfok0301@sp.jpnp.ne.jp)